

やす い まさ よし

安井正義

輸入産業を輸出産業にする — 安井兄弟、執念の国産ミシン1号機 —



安井正義(1904～1990)
第1回渡米時、搭乗機前にて(1950)

し出回っていたのは95%がアメリカのシンガーマシンで、残りはドイツとイギリスのものだった。当時、シンガーは、技術力、資本力と月賦販売方式により日本の市場を独占していた。家庭用ミシンの国産化を目指す努力も積み重ねられていたが、外国製品には歯が立たず、国産品は出てもすぐ市場から消えていく状況であった。正義は、大阪での修行と見聞から、「自分の手で何とかしてミシンを国産化したい」、その国産ミシンで「輸入産業を輸出産業にする」という決意を心に期した。

名古屋に帰り、さっそくミシンの国産化に取り組もうとした。資金もなくミシンの国産化に取り組むなど当時としては夢物語に等しかった。父兼吉は仰天して反対したが、正義は、「金も学問もなく、あるものは十人の兄弟姉妹の労力とミシンへの情熱ばかりだ。資本は大切だが、すべて自分たちの労力でやれば金はなくともよい」と、ミシン国産化に乗り出した。

■安井兄弟の努力が結実した家庭用ミシン1号機

1924(大正13)年、資金作りのために麦わら帽子製造用水圧機の製造販売を始めた。ミシン製造に必要な工作機械を買うためであった。

1925年、正義は社名を安井ミシン兄弟商会と改称し、麦わら帽子製造用環縫いミシンの国産化に取り組んだ。その1号機は、1927年に完成した。発売を開始した1928年の年号から「昭三式カンヌイミシン」と銘打って、初めて「BROTHER」の商標で世に出した。しかし、家庭用ミシンの



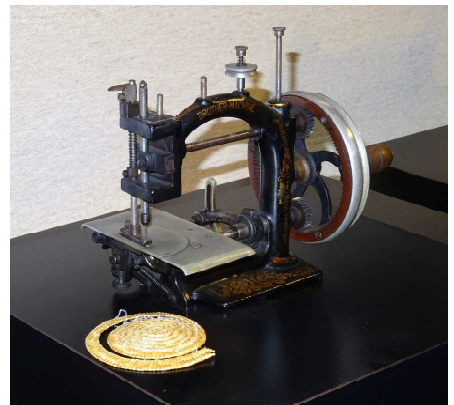
ミシンの組立工場

写真：ブラザーミュージアム提供

ブラザー工業(株)の創業者安井正義は、1904(明治37)年、名古屋市熱田区に10人兄弟姉妹(6男4女)の長男として生まれた。父兼吉は熱田兵器製造所に勤務する職工であったが、無類の機械好きで、自宅の6畳間を改造した小さな修理工場外国製ミシンの分解・組立・修理などの内職をしていた。1908年、兼吉27歳の時に、自宅に「安井ミシン商会」の看板を掲げて独立し、ミシンの修理販売業に専念することとなった。ところが兼吉は体が弱く、そのうえ、腕ひとつで10人の子供たちを養わなければならない家計は楽ではなかった。正義は父を助けて9歳の頃から仕事場に立ち、ミシンの技術を覚えた。正義は、小学校卒業と同時に家業を継ぎ、ミシンの修理・販売を一人前にこなして、家計と幼い弟妹を支えた。

■金はなくとも兄弟が力を合わせて

1921(大正10)年、17歳の正義は、大阪でミシン修理業を営む松原商会へ修業に出た。大阪はミシンの本場である。しかし



麦わら帽子環縫用の昭三式ミシン
(1927年) ブラザーミュージアム蔵



ブラザーの家庭用ミシン1号機(1932年)
ブラザーミュージアム蔵

国産化には、最も重要な部品シャトルフック(中釜)の開発、量産化という技術課題を克服しなければならなかった。正義・実一(四男)兄弟が中心となって、シャトルフック製造用の機械設備を自作、悪戦苦闘の末、1932年夏にドイツ製を上回る製品を完成させた。その頃、正義は家庭用ミシンの試作機ができるまでになっていた。その試作機に改良を重ね、1932年の暮れ、悲願の家庭用ミシン1号機が完成した。正義が国産化を決意して11年目のことであった。

その後、安井ミシン兄弟商会は、日本ミシン製造(株)を経て、今日のブラザー工業(株)へと発展した。

(石田正治)